

国際政治と国際法における自然法理論の使命

田村 幸策

- 一 自然法理論の革命性
- 二 自然とはなんぞ
- 三 古代と中世の自然法理論
- 四 近代の自然法理論とグローテウス
- 五 近代国際法と自然法理論

一 自然法理論の革命性

ブライス卿の有名なディクタム⁽¹⁾によると、「二千年近くも、無害な処世訓であり、平凡な道徳律ともいえたものが、十八世紀末に、古い王制を粉碎し、ヨーロッパ大陸を震撼した、ダイナマイトの塊になった。今やこの古い理論(自然法)が破壊的政治勢力に発展した。今日は何人も、この革命的性格が常に、その理論のうちに潜在していたことを知った。

異常なことは、大多数の革命的思想とはちがって、その爆発的要素が、かくも長年月、眠らされていたことだ」とある。しからば何故に、自然法理論が、かくのごとく破壊的政治勢力になったかの理由に関し、ブライス卿はジョン・ロックが「理性から生れた自然法は、すべての政府に先行し、すべての政府の上位にあるため、暴虐に反対して、自由権を主張する権利を、人間に与える」と主張した。故にロックにとっては、十七、十八世紀における大部分の思想家と同様に、自然法は理性の生んだ子であり、自然権の基盤であるから、自由の同盟者である。自然法は自然権の名の下に、一七七六年アメリカ独立宣言の起草者によって呼び出され、それから直ちに征服者として、近代政治の分野にはいり込んだ。同時代にこの自然法理論はジャン・ジャック・ルソーによって、かれの自然状態理論 (Theory of State of Nature) 並に社会契約理論 (Theory of the Social Contract) によって、ヨーロッパ大陸に流布され、やがて一七八九年フランス革命議會の人権宣言の基礎になった」と説明している。

ダントレーブ教授⁽²⁾によると、「自然法がなかったならば、イタリア半島の、小さな農民社会のけちな法は、決して國際的文明圏の普遍的な法にはなりえなかったであろう。自然法がなかったならば、中世に行なわれた神的英知と世俗的英知との偉大な綜合は可能でなかったであろう。また自然法がなかったならば、アメリカの独立もフランスの革命もおそろくなかったであろうし、また自由と平等という偉大な理想は人間の胸のうちに発見されたのみで、後世の法律書にははいりえなかったであろう」と自然法の功績をたたえ、更に「アメリカの独立とフランス革命との前後に、自然法理論は既に自然権の理論に転化せしめられていた。法律家、哲学者、政治論者たちが、長年月間、使用してきた古い自然法理念が、近代人をして既存の諸制度に挑戦するため、即座に使用できる解放の原理と化せしめた。この自

然權なる理論は、アメリカ人のいう基本法 (fundamental law) と密接に結合しているが、その基本法はヨーロッパ人のいう自然法なる理念のアメリカ版にすぎない。一七七六年のバージニア權利章典は一六カ条の基本的人權を厳かに宣言している」と、自然法と自然權との關係を述べ、自然法が革命理論になったのは、自然法が自然權に転化されたためであることを明かにしている。

かくのごとく自然法理論の革命性は、自然法が自然權に転化されたためであるが、これは法と權利なるラテン語が、同一の言葉で表現されたことにも由来するとの説がある。近代の政治哲学者は、自然法を *ius naturale*、中世の道德学者は *lex naturales*、ローマの法律家は *ius naturale* とよんだ。ホッブスによると「*ius* と *lex*、*right* と *law* とは混同されているが、両者は区別しなければならない。*right* は行動するか、それを我慢するかのものである。自由であり、*law* はそのいずれか一方を決定し、それを拘束することであるから、法と權利の差は、義務と自由の差と同様だ」とある。ホッブスは「自然法」と「自然權」を対立したものと考えているが、十七、十八世紀の自然法学者の大多数は、両者は対立ではなく、自然法は自然權の必要な前提条件だと解していた。十八世紀の中頃ウルフは「われわれが自然法 (*ius natural*) と言う場合、それはいつでも、われわれが法を意図しないで、むしろ自然法の力によって、人間に所属する權利を言っている。それが自然的だ」と述べている。ともかく近代の自然法に驚くべき威力と活力を与えたものは、人間の權利を主張したことであって、合理主義と個人主義と急進主義との三者が結合して、自然法という古い言葉に全然新しい意味を与えた。すなわち、普遍的な法体系を建設し、倫理の合理的基盤を提供するため呼び出された自然法なる理念が、自然權に属する理論の定式化を鼓吹し、遂にその權利は、全人類の胸から取消しえない、爆発的勢力の基盤に

なった。オットー・ギールケは名著「自然法と社会理論」において自然法の不朽の精神は決して絶滅されえないとし、「もし自然法の精神が、実定法の体内に入ることを拒否されるれば、その精神は幽霊のごとく、部屋中を羽ばたきまわり、法の体内から生血を吸取る、吸血鬼と化するおそれがある」とすら述べている。

二 自然とはなんぞ

アーネスト・バーカー教授によると、「正義」の源泉としての「自然なる理念」または「事物の自然的秩序」なる理念は、ストアック哲学に発し、遠く紀元前四世紀末もしくはそれ以前に遡るとある。その自然に関するストアックの思想が、ローマの法律家に伝わり、次いでキリスト教の教父たちに採用されたため、宗教的信仰と道徳哲学とを混淆した思想になった。法的小よび政治的思弁に用いられた「自然」なる言葉は、ストアックの始祖ゼノからルソーの時代に至るまで、人間はそうなすべきものだとの「当為」を示す宗教的倫理的理念であった。ストアック哲学の理解する「自然」は「宇宙における支配的原理であって、それは理性と神とであった」。すなわち自然なる言葉は理性なる言葉と同義語であり、その理性は神と同義語であった。自然を理性や神と同一視することは、捕えがたい微妙なことだが、それでもなお「支配的原理」であって、人間が神とともに共有する理性の至上命令であった。ストアックの信条によると人間はその本質的構造と性格において、合理的存在であり、各人は宇宙的理性の分離した一部を構成し、すべての人間は、神の構造と性格の全部に浸透する、理性を共有するとの前提に立っている。この前提から三つ

の結論が引出される。第一の結論は人間はその性格において合理的であるがため、かれらはすべてその行動において自由かつ自治的なものとみなされなければならないこと、これは「自由の結論」であって、ストアック哲学は暴虐に反対する者を激励する原理になる。第二の結論は人間はすべてかれらの性格において合理的であるがため、すべてはその地位身分において平等にみなさねばならない。これは「平等の結論」であって、ストアック哲学は奴隷制度の廃止でなくとも、その改善に影響力を与える原理になる。第三の結論は、人間は理性という共通の要素によって、相互に結びついているため、すべての人間は、かれら共通の性格に合致する、共通の法の下に、世界社会の連帯をつくらなければならない。これは同胞に対する「博愛の結論」であって、多様な都市国家と多種の市民法をもった、古代ギリシャの世界において、三つの結論のうち最も「革命的」な理論であった。ストアックの前提と三つの結論は、古代ローマ、中世、啓蒙時代、フランス革命と、二千年以上も当代の思想として流れつづけ、われわれ自身の時代に至ってもなお流れつつある。「自然という理念は物質的（山川草木など）な理念ではなく、神と人間に関する精神的性質の理念である」。より精確に言えば、神の性質に関する宗教的または神学的理念であり、これに対応する人間の性質に関する倫理的理念である。

セイバイン教授によると⁽⁴⁾「自然対因習」(nature versus convention)に関する大論争が、紀元前五世紀のアテネ人の間に広く行なわれた多くの証拠がある。その後もしばしば行なわれたごとく、この問題は「より高次の法」(自然法)の名の下に、現存の因習および現行の法に反対する、反逆人を防衛しえたかも知れない。ソフォクルスのアンチゴーンこそ、詩人が「人間の法」に対する義務と、「神の法」に対する義務との衝突を描いた、最初の作品である。明治

維新の指導原理の一に「旧來の陋習 (convention) を破り、天地の公道 (nature) に従う」とあった。

アリストートルは法や道徳を、因習 (convention) だとする主張に反対して、「自然」なる言葉の、注意深き再定義を行なった。この定義は科学のあらゆる部門にも適用され、哲学の一般的原则にされた。それによると、最も簡単な最も原始的なものが、「時間的」には最初に現われ、より完全で完成したものは、成長が行なわれた後においてのみ現われるが、後の段階が前の段階よりも、事物の眞の「自然」をより十分かつ適当に示す。たとえば、種子はそれが発芽して草木に成長したときのみ、その性質 (自然) を現わす。土壤とか熱とか湿気のごとき、物理的条件が必要だが、たとえこれらの条件が同一であっても、種子 (櫟の実と芥子の種子) が異なっていれば、それが草木に成長すると、全く異なったものになる。アリストートルはこの差異の原因は種子にあると推理し、それぞれの草木は、それ自身の「自然」(nature) を内部に包蔵し、漸進的にこれを開いて自分自身を示し、暗黙に種子が包蔵していたものが明白になる。アリストートルは同種の説明を、人間社会の発達にも適用し、たとえば、時間的には家族が国家より先行しているが、「自然によって」は、国家が家族よりも先行していると主張している。なぜなら、家族よりも国家が、より完全に発達したものであるが故に、社会がそのうちに暗黙に包蔵するものをより多く啓示できる。国家は人間のみがもつ力を、発達しうる唯一の手段であるがため、国家が若干の点で本能に反対するものたる意味において「自然的」である。櫟の実にとって、櫟の太木に成長することが「自然的」であるごとく、人間にとっては、国家において最高の力を發展することが「自然的」だとの主張である。

三 古代と中世の自然法理論

自然法の起原はギリシャのストアック学派の哲学にある。ストアックにとっては「自然」は「理性」と同義語であり、その「理性」は「神」と同義語であった。かれらの所信によると人類の住む真の都市、人類の真の政治団体は一つの「神の都市」(city of God)、すなわち古い歴史的、実定的都市を超越した、コスモポリス (Cosmopolis) であること、すべての人間は合理的な動物として神の都市に結合していること、その神の都市とは、理性の都市、自然の都市である。かれらはまた真の法はこの都市の法、すなわち、理性の法、自然の法だと信じていた。

ストアック哲学の始祖ゼノの教えによると、人間は正義に関する別な法則に分割された、異った都市に住んではならない。人間はすべての人間を同じ仲間の市民とみなさねばならない。あたかも共通の法の下で共通の牧場でいっしょに草を食う羊の群のごとく、一つの生活と一つの秩序がなければならぬ。この共通の法こそ普遍的で自然に合致したものである。しかしそれは「理想の法」(ideal law)であって、人間が純粹に合理的である場合においてのみ、現実となりうる。その法に関する原則も理想的原則であって、そのうちには「平等」の原則がある。すべての人間は自然によって、かつ合理的な動物として平等である。自然によって、女子は男子と平等であり、奴隷は主人と平等だとある。これがゼノの教えであって、その効果は後年ローマに伝承されて発揮された。

ローマではセネカの時代になると三つの異なった法または法理念があった。第一は「市民法」(ius civile)であって、

ローマの市民にのみ適用され、第二は「万民法」(ius gentium)であつて、ローマの裁判所が、訴訟当事者がローマの市民たると外国人たるとを問わず適用した法である。その主たる内容は契約法であつた。ローマの法律家たちは、この万民法を理論的見地から、「すべての国の実定法に発見される、民族的特殊性に対立する、普遍的要素」だと定義した。アリストートルの言う「共通法」(common law)または「自然的正義」(natural justice)に極めて近い思想である。ローマ人が戦場で失つた領土を再征服した、といわれるのは、この法によるものである。剣でつくつた大ローマ帝国が、法によって再興されたことを意味する。第三は「自然法」(ius naturale)であつて、ローマ人は「人間共通の性質によって、人類に負わせられた法、人間の需要と人間の本能にしたがい、理性によって負わせられた法」と定義している。理論的見地からは万民法と自然法との区別は困難であつて、ローマの法律家たちは両者を区別しなかつた。しかし實際的見地からは、万民法は主として契約に関する一団の商法規定であつて、自然法は常に一般的な法的理想であつた。自然法の本質はストイックの理想たるすべての人類に共通の法、すなわち理性と自然の法である。自然法はストイックの平等の原則で浸透され、人間は自然の大法廷では平等であるが、自然法は現実の法廷で強制される現実の法ではない。自然法は物の見方であつて、裁判官の心のうちにある「人道になつて法を解釈する精神」であり、現実を実施される法に影響するものだが、現実の法そのものではなく、しかもこれに影響あるものである。ローマの法律家たちは、中世およびその後主張されたごとく、かつて自然法が具体的な実定法に優先すると主張したことはない。かれらがしたことすべては、現実の法を法廷で適用する場合、自然法の理念をこれに影響させたのみである。またいかなるローマの法律家も、かつて自然法を、特定の期日または時代と、関連させたことはなかつた。自

然法には始まりもなければ、終りもなかった。

ストイック主義がローマの自然法に転位し、そのローマの自然法がキリスト教の伝統になった。しかし初期のキリスト教の教父たちは、人間の純潔な性質は「人間の墮落」(Fall of Man)によって腐敗させられたとの考えから「絶対的自然法」と「相対的自然法」とを区別した。絶対的自然法は「支配」(dominium)を知らない法である。政府は人民に対し、所有者は財産に対し、主人は奴隷に対し、支配を行なわない。人間は「自然法によって」国家から解放され、かれらはすべての物を共有し、かれは相互に平等である。相対的自然法は人間の墮落以後人間の性質の変化と調整した相対的な法であって、国家も財産も奴隷すら、この相対的自然法においては、すべてがかれの地位を発見しうるけれども、かれらはすべて理想的性格のなにかを持たねばならないのみでなく、かれらが真にその地位に値いせんとするならば、罪の上位に立ち罪を救うための威厳に到達しなければならない。相対的自然法は絶対的理想と実定法の現実との中間にあるため、双方から攻撃される。時には絶対的理想が立上って、財産的権威や政治的権威、または人間の不平等性に反対して反乱を起こし、しばしば決定的事実によって、その絶対的権利を主張することがある。しかし自然法の伝統は、相対的自然法の形において、中世のみならず、近代の歴史におけるカトリック教会に存続してきた。トーマス・アキナスは法を四種に分類し、第一は「神の法」(lex divina)であって、神自身が人類のために制定した実定法で、聖書を通じ神の意思を神が啓示したもの、第二は「人間の法」(lex humana)で人間社会がその構成員のために制定した実定法で、代表的な君主王侯を通じ、その権威を神からえたもの、第三は「永遠の法」(lex aeterna)であって、神の最高不変な目的に内在する、すべての動物のための法、第四は「自然法」(lex naturalis)であって、人間の理性

という神性の能力によって発見され、神の意思と目的並に神の理性の支配を理解せんと努めるものがそれである。キリスト教会はこの計画の下に動き、自然法の理念はこの計画のうちに、中世が終った後までも引続き顕著な役割を演じた。十六世紀の偉大な道德神学者にして、道德哲学、政治哲学を、神学と関連して研究した人たちは、自然法の見地から政治哲学を討議している。その最も著名な学者はスペインの偉大なジェズイット教徒スアレスであるが、かれは主権者を「自然法の使徒」(disciple of the natural law)だといっている。その他ジェズイット教徒にはレシウス、ルゴー、モリナなど、社会と國家に関し、自然法哲学を解明した多くの学者がある。ドミニカ派の学者にもこの例に倣ったものがある。

四 近代の自然法理論とグローティウス

國際法学の父と呼ばれるオランダのフーゴー・グローティウス(二五八三—一六四五年)は、同時にまた近代自然法理論の始祖とも言われている。後者の評価は十七世紀における自然法理論の最大解明者プーフェンドルフ(一六三二—九四年)が、グローティウスこそ中世の大学とスコラ学派において、教えられていたものの域を超越え、自然法理論を幾世紀間も閉鎖されていた暗黒のうちから引出した、比類なき人物として賞賛したことに由来する。プーフェンドルフ自身ドイツの大学において自然法の講座を担当した最初の学者である。ダントレーブは更にグローティウスには、哲学の分野におけるベーコンやデカルト、自然科学の分野におけるガリレオやニュートンとともに、法理学の分

野において、現在の新しい世界の予言者の一人たる、特別席が留保されていると推賞している。

しかし、グロートゥスは決して自然法理論に革命的な展開を行なったわけではない。かれの偉業を一言に要約すれば、自然法理論を「神学」から引離し、これを「合理主義」(rationalism)の土台に乗せたことにある。しかしかれは「神が存在しないとか、人間の事は神に関係ないとか、と言うことは極悪の罪になることなしには、容認しえないことであると声明し」「仮りにこれを容認したとしても、われわれがこれまで述べてきたことは、ある程度の効力をもつ。この見解と正反対のことが、一部は理性により、一部は恒久的伝統により、われわれのうちに植付けられ、昔から奇蹟のみならず多くの証拠によって確認されている。その当然の結果として、われわれは例外なく、造物主としての神に従わねばならない。われわれの存在と所有との全部は神に負っている。特に神は多くの方法で、神自身が至善至強たることを示しているため、神は神に従う者には至大の褒賞を与えうる。神自身が永世だからその褒賞も永世である。更にわれわれは神が褒賞を与える意思あることを信すべきである。もし神が明白な言葉で約束されるならば、ますますかかる信念を大切にしなければならない。神が約束したことを、われわれキリスト教徒が信するのは、証拠による疑いを容れない確言によって納得させられているからだ」とある。「戦争と平和の法」のプロレゴメーナ第十一項、「仮りに神が存在しない」とあって、グロートゥス自身は深くキリスト教の精神に浸り切っていた敬虔な人物であって、神が人間の事に関係しないなど、決して容認しなかったことは極めて明白である。それが証拠には「ここに自然による源泉の外に、今一つの法の源泉がある。それは神の自由意思である。この神の意思にはわれわれが理屈抜きに服従せねばならない、とわれわれの理性が語っている。われわれの言う自然法には、人間の社会生活に關す

るものと、人間のうちに植付けられた本質的な特性からくるものとが含まれるが、これらは神に帰すべきが正しいわけは、かかる特性がわれわれのうちに存在することを神が意欲されたからである。この意味においてクリシパスとストイックが、いつも法の源泉は、ジュピター神自身以外に求めてならないと言っているわけである。ラテン語の法 (iure) という言葉は、おそらくジュピターなる言葉に由来する」(同上第十二項)とあり、更に「神が与えた法によって、神が人間の基本的特性を、推理力の弱い人たちに対してすら、より明らかにした今一つの考慮がある。それは神がわれわれを、今日はわれわれ自身の利益のため、明日は他人の利益のためと、反対の方向に引込まんとする、衝動に屈することをわれわれに禁じ、それがためわれわれのより暴力的な衝動を効果的に抑制し、その衝動を適当な限度に抑止するよう努力させることだ」(同上第十三節)とある。自然法は神によって人間に植付けられたもの、それゆえ自然法は神的起源をもつこと、神の啓示法は自然法に関する人間の知識を確実にしそれを助ける意味である。

グローティウスの目的は、神学的論争が漸次その勢力を失いつつあった時代に、人を信服させる法体系を建設せんとするにあった。それがためかれは、かれ以前の誰人よりも、進んだ仮定を土台として検討を行なった。かれよりも一世代先輩たるフーカー⁽⁸⁾(一五五三—一六〇〇)よりも進んでいた。グローティウスは神学的前提を離れて法理論を築きうることを立証し、かれの後継者たちがその事業を完成した。すなわちかれらが苦心して仕上げた自然法は全く「世俗的」(secular)であった。かれらは中世の神学者たちが「妥協」させんと大いに苦心したことを截然と「分割」したのである。したがって十七、十八世紀の大著述に展開された自然法理論は、プーフェンドルフからブルマキ、バツテルに至るまで「神学」とは無関係であった。それは純然たる合理主義に基づく建造物であるが、必ずしも神に

関する古い理念に敬意を払うことを拒否するものではなかった。ベッカーが指摘するごとく「神は人間との直接の接触からますます後退した」のみであって、アメリカの独立宣言に言うごとく自然法は「自然の神の法」になった。

グローティウスの定義によると「自然法とは正しい理性の命令であって、ある行為が合理的な性質に合致するか否かによって、そのうちに道徳的低劣性か、道徳的必然性かの性質をもつのである。その結果かかる行為は自然の創造者たる神によって禁止されるか、命令されるかである」（戦争と平和の法「第一章第十節」）。ここで大切なことはグローティウスが神の命令に言及していることの精確な意義である。セイバイン教授によると、グローティウスが「神に言及したことは、かれの定義になにももの付加しなければ、暗に宗教的制裁を意味するなものもない。なぜなら自然法はたとえ仮定によって神が存在しなくとも全然同じことを命令するからである。そのみでなく神の意思によっても変更されえない」からと解釈している。事実グローティウスによると「自然法は神によっても変更されえない意味においてすら、不変なものである。神の力は測り知れないものがあるとはいえ、そこには神の力もその上には及ばない若干のものが存在するといいうる。このことはただ現実と合致するなんらの意味もたず、また相互に矛盾する場合にのみ言えることである。そこで神ですら二を二倍すれば四にならないようにさせることができないごとく、神はまた本質的に悪なものを悪でないものにさせえない。かくして神自身もこの基準にしたがって判断されることを許している」（同上第五項）との革命的ディクタムを下している。グローティウスは更にこれを追加し「時と自然法がなにごとかを命令した行為に、変化の外観が現われると、不注意な人を欺くことが起こる。その場合事実は自然法は不変でなんら変化をうけないが、自然法が命令した事柄が変化をうけたのである」（同上第六項）と説明している。な

お自然法の内容に関しグローテュスは「人間の知性と合致する社会秩序を維持することが、本来の意味における法の源泉であつて、法のこの分野に所屬するものとして、(一)他人に所屬する物を侵さないこと、(二)他人に所屬する物を、そこからうけた利得とともに返還すること、(三)約束を履行する義務があること、(四)自己の過失によって引起こした損害を賠償すること、(五)罪に應じて罰を課することが含まれる」(プロレゴメーナ第八項)と述べている。

バツテル(一七二四—一六九九年)の著書はグローテュスに次で広く読まれ大きな影響を与え、特にアメリカで高い權威をもった理由は「一定の条件下で国家の一部は他の部分から分離する權利」があるとの理論を展開したかれの著書が、アメリカ独立の前年というユニークな歴史的時機にアメリカに輸入されたことにある。かれの名著「國際法、國家と主權者の行動と事務に適用される自然法の原則」(一七五八年)は、プーフェンドルフの「自然狀態説」を展開し、「國際法はその起因において自然法を國家間に適用したものにすぎない」と強調し、「各國は自己の行動に対する唯一の裁判官で、かれの良心に対してのみ自然法を守る責任がある」と主張した。ブライアリーはバツテルが國家の「獨立」を強調することは、グローテュスが自然法をもつて國家の專斷的行為に對する、法律上の障壁としたこととは逆だと批判した。バツテルの著書はアメリカの獨立とフランス革命の指導原理たる自由、平等、獨立の思想を基盤として國際法を説明した点に大きな特色がある。かれの著書が甚大な影響を与えた主因もここにある。

五 近代國際法と自然法理論

ヘンリー・メーンは「自然法の最も偉大な機能は、近代国際法を生んだことである」と道破した。まことに自然法こそ国際法の生みの母である。しかしその自然法もローマ法と結婚しなかったならば、かかる重大な使命を達成しえなかった。国際法なる名の下に各国間の交際を規律する一団の法則が、いつから成立したかの正確な時間を定めることはできないが、十六、十七世紀に現われた偉大な法哲学者たちの著書によって、確定的な形をとるに至ったものだが、これらの学者の著書は、理性と啓示によって発見された道德上の原理と、各国の法制と慣行のうちに発見される実定法および慣習法とを混有しているのが特徴である。前者は自然法、後者は国際法とよばれるものを構成する。この新しい学問の実定的要素の主たる源泉はローマ法であった。

ローマが小さな都市国家から出発して大帝國に發展し、多数の異民族を支配するに至るや、ローマ人と異民族間、並に異民族間相互間に適用するため、固有のローマ人間に行なわれる「市民法」の外に、「諸民族の法」(Jus Gentium)なる特別の私法を案出したことは既にのべた。この「諸民族の法」なる言葉は後に「国際法」の名称になったが、本来はローマの私法である。この言葉には「万民法」なる日本語訳がある。ともかくこの「諸民族の法」は「市民法」よりも、自由かつ進歩的で、しかもその原則が簡単かつ合理的であったため、どこでも、どんな民族にも承認され、普遍的に適用されると信じられた。しかしローマ人をしてこんな合理的な法をつくる考えを促進したものは、かれらがギリシャのストイック学派から学んだ自然法思想であった。全人種は一つの世界に住み、すべての人間はこのコスモポリスとよぶ一大都市の市民であって、その世界は人間の理性によって発見された法に支配されるとの考えが、ローマの共和国時代の末期に輸入され、それが組織力と法制力に長けたローマ人によって、一大發展を遂げたのである。

る。時の経過とともにローマ人はかれらが現実の法として採用した新しい進歩的な「諸民族の法」(万民法)と、理性に合致する理想法たる自然法とを、同義語として使用するに至った。理由は到るところの、あらゆる人間に守られる法(万民法)は、必ずや人間の合理的本能が人間に命じた法(自然法)でなければならぬからであった。

かかる自然法の思想を、中世の末期に出現した主権国間の關係に適用すると、近代の意味における國際法の發生を要求せざるをえなくなること明白である。なぜなら、いかに主権国(主権とは最高の權力)といえども、主権国相互間の關係を法(やってならないこと、やらねばならないこと、やってもよいことのルール)の存在しない、全然無政府状態におくことは、「事物の自然」に背反するからである。国家間の關係は、一個の主権者の意思に基づく法でなく、主権者といえども服従せざるをえない、自然の秩序の一部たる、一段高い法(自然法)によって支配されねばならない。換言すれば新たに生れた近代国家が強調する、独立性と無責任性を中核とする主権理論に対し、国家の無責任性を否定し、国家の独立性が最終的なものでない、と主張する自然法理論を、国家間に適用することになるからである。

特に十六世紀のヨーロッパにドイツを初めとしてローマ法の「継受」(Reception)が広く行なわれたことが、近代國際法の起源に重大な關係がある。当時ローマ法の原則は到るところ大なる尊信をうけ、事実ローマ法は「文字に書かれた理性」(ratio scripta)として尊重され、ヨーロッパの諸民族が継承した共同の遺産であって、到るところ人間理性の最高の勝利として尊信をうけつつあった。したがって当時の学者はローマ法の存在によって、自然法の内容を発見するに困難はなかった。近代國際法の創設者たちが、いやくも主権国間の關係にして個人間の關係に類似するものを発見すれば、躊躇することなくローマ法の原則に訴え、それによって國際法上の原則を樹立せんと努めたことは当然で

ある。一方当然かつ普遍的に拘束力をもつ理想的法則たる自然法の存在を信ずることと、他方到るところ尊信をうけつつあった世界的法律制度たるローマ法の存在することが、近代国際法の創設者たちを駆って、自然法を基盤として国際法を樹立せしめたことは察知するに難くない。しかし自然法の使命は、国際法の誕生に主役を演じたのみに止まらない。すなわち自然法は立法上その根底を構成する不可欠な原則であるばかりでなく、法の実際の運営上にも欠くべからざる原則である。いかなる裁判官もかれの面前に提起された事案が悉く現行法でカバーされていることを望みえない。かかる事態に対する裁判官の指針になるのが自然でなければならない。

国際司法裁判所規程第三八条は同裁判所に付託された紛争を裁判するに当って、適用すべき規則の一として「文明諸国によって認められた法の一般原則」をかかげている。起草者の一人デカンは「自然法」の思想に基く条文を提議した。ともかくこの規定が裁判所規程に採用されたことは国際法の発達史上重要な一標程を構成する。理由は国際法には条約と慣習の外に、第三の源泉として自然法が加えられたことは、自然法学派 (naturalist school) に勝利を与えたからである。なお裁判所規程は訴訟当事者の「合意」があれば、裁判所は「衡平と善」 (ex aequo et bono) によって裁判を行ないうる権限を与えられている。ローマ大法典の「学説集」 (Digest, liber I, titulus I, De Iustitia et Jure) に、法は技術と学問とを一にしたものだが、技術としては「善と衡平」を促進することだとある。これが裁判所規程の源泉を構成すること疑いを容れない。

〔注〕

- (1) Bryce, J., *Studies in History and Jurisprudence*, Chapter XI, the Law of Nature.
- (2) D'Entrèves, A.P., *Natural Law*.
- (3) Ernest Barker's Introduction to the "Natural Law and the Theory of Society" by Otto Gierke; Ernest Barker, "Principle of Social and Political Theory".
- (4) Sabine, G.H., *A History of Political Theory*.
- (5) アーネスト・バーカーによると、「自然法なる理念の起原は、人間精神の古い破りえない運動（その証拠はソフォクルスのアンティゴネに発見できる）に求めうる。自然法理念はこの運動を永遠不変な正義理念の方向に推し進める。正義は人間の權威で表現するか、またはすべきものであるが、人間の權威で造ることはできない。人間の權威が正義を表現しえない場合、人間はかれの支配力の減少または喪失によって、その罪を支払わねばならない。この正義は宇宙の自然から、神の存在から、人間の理性から来る、より高いまたは最終的な法として考えられる。その結果この法は、最後の法としての意味において、人間の造る法よりも上位にある。その結果、立法者はこの法の下にあるか、それに服することになる。これらの理念と、その結果に向う人間精神の運動は、既にアリストートルの『倫理学』と『修辭学』とに現われている。しかしこの運動が、初めて大規模にして一般的な表現に到達したのは、ヘレニズム時代のストアック派の思想家たちのうちであった。その一般的な表現が、ストアックの学者たちから一七七六年アメリカの独立と一七八九年フランス革命まで、連綿として存続し、文明人にふさわしい行動の伝統になった。多くの世紀の期間、神学と同盟（カトリック教会に採用され、スコラ神学者や宗教法学の一般的教養の一部を構成）した自然法理論は、十六世紀に独立した合理主義の制度になり、十七、十八世紀間も存続した。それは自然法の世俗的学派の哲学者たちが、公然解明したためであった」(Ernest Barker, *Tradition of Civility*)と自然法の歴史に関する雄大な描写を行なっている。
- (6) シェロが与えた自然法の定義によると「眞の法は、自然に合致した、正しい理性である。この法は普遍的に適用され、不変にして永遠である。この法はその命令によって義務を課し、その禁令によって悪行をさける。その命令も禁令も、善人に対しては無駄でないが、悪人に対してはなんら効果ない。この法を変更せんとする試みは罪であり、その一部分でもこれを廃

止せんとする企ても許されない。この法を全部廃棄することは不可能である。われわれは元老院によっても、人民によっても、この法の義務から解放されえない。われわれはこの法の解明者や解釈者を、われわれ以外にさがす必要はない。ローマとアデンとに異なった法はなく、今日と将来とに異なった法はない。一つの永遠不変な法が、すべての国民と、すべての時代に有効である。われわれすべての頭上には、一人の主人と、一人の支配者、すなわち神がいる。その神はこの法の制定者であり、公布者であり、実施する裁判官である」(De Republica, III, XXII, 33)。シセロのこの有名な定義を、後世に伝えたのは、キリスト教の学者ラクタンティウスの功であって、意義深いとダントレーブ教授は紹介している。